

# 教員養成課程の学生の音楽学習経験と音楽科教育の 被教育体験に関する報告

三 沢 大 樹

Music Learning Experiences at School:  
A Case Study of Students in the Teacher Training Course

MISAWA Daiju

2020年11月6日受理

## 抄 録

今後の音楽科教育の在り方を教員養成課程の視点から考察する資料の収集を目的として、初等教育課程に所属する学生らを対象者とした、音楽学習経験及び義務教育段階での音楽科の被教育体験等に関する回想を通じた調査を3年間に亘り実施した。結果、対象者は同世代の者と比較して大学入学以前にある程度の音楽学習経験があること、音楽科の授業で経験した学習内容や活動には印象に残っているものと印象の薄いものがあり、学習指導要領に示された音楽科の4つの内容の印象には偏りがあること、特に小学校時代は〈器楽〉に関する印象が強く、それが中学校では〈歌唱〉に移行する傾向にあること、合唱コンクール等の学校内外で行われる行事活動に向けた準備や練習に取り組んだ体験を挙げる者が多く、またその活動に対して比較的肯定感を以て捉えていること、〈音楽づくり・創作〉に関連する記述が極端に少なく、現在の好意度も低いこと等が明らかとなった。

キーワード：音楽科教育，教員養成，音楽学習経験，音楽科の被教育体験，音楽の諸活動に対する好意度

## 1. 研究の背景と目的

平成28年12月の中央教育審議会の答申を受けて、平成29年3月には小学校及び中学校の新しい学習指導要領が告示され、翌30年3月には高等学校の新しい学習指導要領が告示された（以下、新学習指導要領）。現在移行期間にあり、数年の内に全ての校種で全面実施されることになる。教員養成に関する動向としては、国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書の中で国立教員養成大学・学部等をめぐる課題とその対応策が示されたこと、また教員の育成、研修を通じた教員育成に於ける全国的な水準の確保を行っていくことを目的に教職課程コア

カリキュラムが作成され、全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力が示されたところである。時代は正に教育内容と教員養成の両面から変革期にあると言っても過言ではなからう。

このような背景の下、義務教育・後期中等教育の教科目に位置付けられる音楽科に関しても、これまでの学習内容を省察し今後のあり方を幅広い視点から検討することが必要であろう。この度筆者は、本学の初等教育課程の学生を主な対象者として、これまでの音楽学習経験と、義務教育の段階で音楽科の授業を経験しながら感じてきたこと、印象に残っている内容や活動、実生活で音楽とどのように関わっているか等に関する調査を実施し、彼らの被教育体験に対する傾向を中心に確認を行った。本稿では、この調査結果の分析を通して、今後の音楽科教育の在り方を教員養成課程の視点から考察する上での、基礎的な資料に供することを目的とする。

## 2. 方法

本学の初等教育課程に所属する学生を主な対象者として、これまでの音楽学習経験及び義務教育段階での音楽科の被教育体験等に関する回想を通じた調査を3年間に亘り実施した。今回の調査対象者は、本学で筆者の担当する「音楽科教育法（教科の指導法／小学校教諭免許必修／2年次開講）」を平成29年度から令和元年度の間に履修した学生で、平成29年度125名、平成30年度130名、令和元年度133名の計388名から回答を得た（不完全回答者を含む）。調査は、注意事項及び倫理的配慮の説明を含めて概ね30分間で実施した。調査手順に関しては、平成29年度の調査では筆者が作成した質問紙を用いて実施し、回収後に筆者が個別にテキスト入力して電子データ化を行った。平成30年度及び令和元年度の調査では、Microsoft Office 365の一機能であるMicrosoft Formsを使用してweb上に回答させることで、直接電子データとして回答を回収した。対象者には大学の情報処理室に設置されているPCから、筆者が事前に作成したフォーム（項目は質問紙と同じ）に任意のwebブラウザでアクセスして貰い回答を求めた。調査項目は以下の5項目及び属性に関する項目（性別、所属学科・専攻等、高等学校で音楽授業の履修状況、授業外音楽学習や活動経験の有無）である。

- ①小学校で学んだ音楽の授業について印象に残っている学習内容や活動（複数回答は2件まで）及びその情意的評価（5件法）
- ②中学校で学んだ音楽の授業について印象に残っている学習内容や活動（複数回答は2件まで）及びその情意的評価（5件法）
- ③音楽科の授業に臨む姿勢（学校種別，5件法）
- ④音楽科の授業で学んだことの現在の生活への活用（学校種別，自由記述）
- ⑤音楽の諸活動に対する現在の好意度（5件法）

今回の調査と同様に、教員養成課程の学生を調査対象とした音楽科教育に関する先

行研究としては、伊藤・笠島が2002年に実施した調査（以下、先行研究）が上げられる<sup>[1]</sup>。彼らの調査では、学生らが小・中学校時代に音楽科の授業を経験しながら感じてきたことや、それらが現在の生活にどのように影響しているのかを回想を通して探ることで、教員養成教育に於ける今後の音楽専門科目の在り方を検討する資料を集取することを目的としており、主に中学校音楽科の被教育体験に対する感想の記述内容を中核に置きながら整理と報告を行ったものである。一方で、筆者による今回の調査は、先行研究の結果に基づいた追試調査でないものの、調査方法及び調査項目の設定に関して参考資料とした。また、結果の考察段階では、比較資料として彼らの調査結果を活用するものである。なお、今回は紙面の都合により、調査対象者の属性及び項目①と②並びに⑤の結果を中心に報告する。また、全ての数値処理及び検定はMicrosoft Office 365 Excelのデータ分析ツールを用いて解析を行い、 $p < .05$ を有意水準とした。

### 3. 本学の初等教育課程について

本学は、1980年に教育学部初等教育課程の単科大学として開学し、系列大学との合併や大学名称の変更を経て、現在では10学部19学科を擁する総合大学である。現在、初等教育課程の定員数は110名で、課程内には国語、社会、数学、理科、音楽の5つの専攻を擁しており、小学校教諭第一種免許状に加えて、各専攻に関連する中学・高等学校教諭第一種免許状の取得が可能である。また、希望者は特別支援学校教諭第一種免許状を同時取得することも可能となっている。学生が2年次に進級する段階で、本人の希望と1年次のGPAを参考にしながら配属専攻が決定される。本論では対象者の音楽学習経験や音楽科の被教育体験を取り扱うことから、特に音楽専攻について確認をしておく、入学段階で音楽実技試験を課されていない学生であっても音楽専攻への所属を希望することが可能であり、その反対に音楽実技試験を経て入学した学生であっても、本人の希望等により他専攻に配属される者もいるのが現状である。このような制度上の理由から、本学の音楽専攻生は、集団として幼少期や学童期から音楽の専門的教育を受けてきているとは限らない。然しながら、音楽活動に消極的である可能性は極めて低いと思われる。また、一部の学部学科に所属する学生が初等教育課程に属する教員免許状の取得を希望する場合は、選考を経た上で、他学部他学科履修生として取得の機会を提供している。

## 4. 結果と考察

### 4.1 対象者の属性

対象者388名の性別を確認したところ、男性195名（H29：62，H30：64，R01：69）、女性193名（H29：63，H30：66，R01：64）であり、3年間を通して対象者の男女差はごく僅かである。調査時の学年は、2年生が最も多く368名（94.84%）で、次いで3年生11名（2.83%）、4年生9名（2.31%）である。音楽専攻に所属する者が3年間の合計で30名（H29：11，H30：10，R01：9）含まれるが、前述したように

彼らが集団として入学以前に特別な音楽教育を受けてきているとは言い難いこと、また音楽専攻生の割合は3年間の平均値で7.73%と僅かであることから、本調査の分析では大きな影響を与えるものではないと判断する。また別の30名(7.73%)は、前述の他学部他学科履修生(小学校教諭免許状取得希望)である。

図1は、高等学校で音楽の授業を1科目以上履修した者(以下、音楽授業履修者)、ピアノや電子オルガン等の鍵盤楽器学習経験が概ね2年以上ある者(以下、鍵盤楽器経験者)、鍵盤楽器以外の音楽学習経験者(部活動を含む)の割合を年度別に示したものである。この図を確認すると、まず、音楽授業履修者の3年間の平均値は53.60%となり、半数以上の学生が高等学校で芸術科音楽の授業を1科目以上履修していることが明らかとなった。鍵盤楽器経験者の割合は、調査年度により10%近くの差が確認されるものの、最も少ない令和元年度でも39.85%と、約4割の学生が鍵盤楽器の学習経験者である。3年間の平均値は43.15%となり、全体としては4割以上の学生が大学入学以前に概ね2年以上の鍵盤楽器の学習を経ていることが明らかとなった。鍵盤楽器以外の音楽学習経験者の割合に関しては、3年間の平均値で27.88%の学生が大学入学以前に吹奏楽や合唱等の部活動、或いは各地域に於ける様々な音楽教育活動を享受してきていることが明らかとなった。日本音楽教育学会が実施した2015年の調査<sup>1)</sup>では、「学校外の習い事をしている」或いは「していたがやめた」の回答者の合計は38.94%、「音楽関係の部活動に入っている」或いは「入っていたがやめた」の回答者の合計は18.48%である。また、ベネッセ教育総合研究所が実施した2009年の調査によれば<sup>2)</sup>、小学生の芸術活動の活動率は33.9%で、具体的な種類(複数回答可)のうち音楽活動に関する項目は「楽器の練習・レッスン」が24.3%、「合唱・コーラス」が2.1%、「音遊び・リズム遊び(音楽教室)」が2.0%等となっており、更には「楽器の練習・レッスン」の内訳を確認すると、86.0%が鍵盤楽器である。これら2つの調査と今回の調査では実施条件等の一致がなされていないことから結果の比較は参考に留めるものの、本調査の対象者は同世代の者たちと比較した場合、集団として音楽科の授業以外でも何かしらの音楽学習を経験してきた者が多いことが推察されよう。

以上から、本学で小学校教員免許状の取得を目指す学生は、大学入学以前にある程度の音楽学習を経験してきている者が比較的多いこと、音楽科の授業経験に関しては義務教育で終了している者が半数近くいる集団であることが分かった。現在の普通高校では芸術科音楽が選択科目であることを鑑み、今後は他の芸術科目と共にリメディアル教育的な措置を講じる等の、丁寧な指導が必要であると思われる。

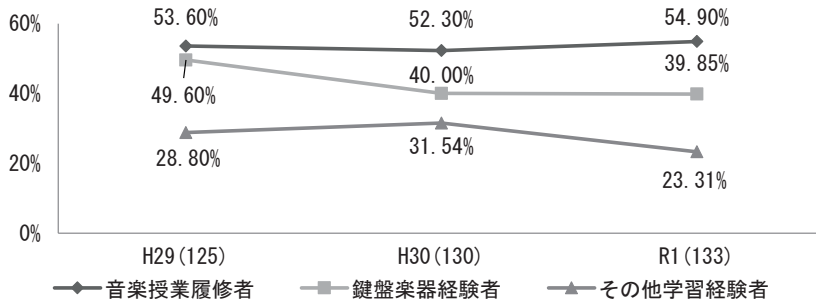


図 1 音楽学習経験者の割合

#### 4.2 音楽科の被教育体験に関する諸相

先行研究では、音楽科の授業に対する感想の記述内容を読み取り、当時の小・中学校学習指導要領「音楽」に準じて「A表現（歌唱・器楽活動のみ分類）」領域と「B鑑賞」領域の他、〈その他〉と〈音楽以外〉の4項目5細目に分類し、記述の内容に対応する情意的（先行研究では情緒的）な評価を「楽しかった（肯定的）」「どちらとも言えない」「楽しくなかった（否定的）」の3段階に分類・整理した上で、音楽科に於ける被教育体験の様相を分析している。一方で、筆者による今回の調査では、彼らの分類を参考にしながらも、上述の設問項目①及び②に対する記述の内容を筆者が読み取り、現行の学習指導要領「音楽」に示された「A表現」領域の3つの活動〈歌唱〉〈器楽〉〈音楽づくり・創作〉及び「B鑑賞」領域の他、〈行事〉と〈常時活動、他〉の2項目を加えた6項目に分類をした。また、情意的な評価に関しては、対象者に直接回答を求めた。なお、分析過程に於いて小学校から中学校に亘る音楽科の授業の印象に関する変容を確認するため、対象者が設問項目①と②の其々に1つ以上の記述及び評価の回答をしていない場合は分析の対象から除外した。その結果、設問項目①では652件、設問項目②では645件の記述と、その情意的な評価の回答を分析対象とした。

##### 4.2.1 全体的な特徴

表1は、印象に残っている学習内容や活動（調査項目①及び②）の回答者数を項目別に示したものである。この表を確認すると、全体としては〈器楽〉に関する記述が最も多く、〈行事〉〈歌唱〉〈鑑賞〉と続き、〈音楽づくり・創作〉の記述が極端に少ないことが分かる。新学習指導要領でも、各学年の内容の指導については、それぞれ特定の活動のみに偏らないようにすること<sup>[4]</sup>が明記されているように、本来音楽科の授業は、〈歌唱〉〈器楽〉〈音楽づくり・創作〉〈鑑賞〉の4つの内容を相互に関連させながら、活動や内容に偏りの無いバランス良く配置された年間指導計画の下に営まれるべきである。この結果から、義務教育現場では特定の活動や内容に偏った音楽科の授業展開が行われる傾向にあるのか否かを判断することは些か困難であるが、少なくとも被教育者側にとっては強く印象に残っている活動や内容と、学習した印象の薄い活動や内容があることが推察される。

表2は、印象に残っている音楽科の授業内容や活動に対する情意的な評価の平均値

を項目別に示したものである。3年間の平均値を確認すると、〈行事〉に関する印象が4.21ポイントと全項目の中で最も高い評価を得ており、校種別・調査年度の別に確認をしても〈行事〉は相対的に高い評価を得ていることが分かる。このことから、音楽科の授業の中で学校行事の準備や練習が行われることに対して肯定的に捉えている者が多いことが分かる。また〈行事〉に関する記述の詳細を確認したところ、「市内音楽発表会に向けて、合奏や合唱の練習をした（小学校）」「合唱祭で歌う曲の特徴や曲想などをレポートにまとめたことが印象に残っている（中学校）」等とする記述が多く、学校内外で実施される行事に向けた準備や練習が授業内で行われている実態を窺い知ることができる。このような音楽科と〈行事〉の関係性について、副島(2017)は「音楽科の学習で取り組んだ成果を発表する場として、このような行事が準備されていることは大変意義深いことである」とした上で、一部の学校では行事が目的化してしまっている現状に苦言を呈し、学校行事として取り組む意義を考え、教科として担う部分と全校で取り組む部分の棲み分けを明確にする等、適正な時数で計画する必要性を指摘している<sup>[5]</sup>。折しも新学習指導要領ではカリキュラム・マネジメントの重要性が謳われたところである。音楽科と行事活動の関係性については、これまで以上に十分な検討及び実践的な検証が進められるべきであろう。

表1 音楽科の授業に対する印象（学習内容・活動）（数）

		歌唱	器楽	音楽づくり ・創作	鑑賞	行事	常時活動, 他
H 29	①小学校 (152)	33	70	5	9	28	7
	②中学校 (149)	53	38	1	30	24	3
H 30	①小学校 (251)	59	92	6	13	63	18
	②中学校 (248)	52	68	4	46	70	8
R 01	①小学校 (249)	40	111	5	10	69	14
	②中学校 (248)	35	60	2	51	87	13
合計		272	439	23	159	341	63

表2 音楽科の授業に対する情意的評価（学習内容・活動）（5件法）

		歌唱	器楽	音楽づくり ・創作	鑑賞	行事	常時活動, 他
H 29	①小学校	4.15	4.10	4.40	2.89	4.36	3.86
	②中学校	3.81	3.92	3.00	3.50	4.29	2.30
H 30	①小学校	3.83	4.27	3.50	4.38	4.24	3.83
	②中学校	3.69	3.85	2.75	3.72	4.20	2.13
R 01	①小学校	3.60	3.97	4.00	4.50	4.26	3.93
	②中学校	3.37	3.75	4.50	3.92	3.93	2.92
平均値		3.74	3.98	3.69	3.82	4.21	3.16

#### 4.2.2 校種別「授業に対する印象」の特徴と変容

小学校時代の印象として回答者数の多い活動や内容の項目と、中学校時代に回答者数の多い活動や内容の項目とを比較してみると、小学校時代は〈器楽〉に関する記述が最も多く、3年間の平均値では41.87%（273回答）を占める。一方で、中学校時代になると〈器楽〉は3年間の平均値で25.04%（166回答）まで割合を減らしている。先行研究では〈器楽〉と〈歌唱〉の関係について、小学校時代には器楽の印象が強く、これが中学校になると歌唱に移行することを明らかにしているが、表1を見る限りでは、〈器楽〉に関する記述は、全ての調査年度に於いて小学校時代の割合が高く、中学校時代になると割合を減らしているものの、〈歌唱〉に関しては調査年度によって結果に違いが見られる。この要因として、先行研究の調査では行事活動の項目が設けられていないことが挙げられる。先行研究では、小学校の場合は器楽合奏についての記述が多く、具体的には学芸会等の学校行事の場面での全体合奏を音楽科教育の一要素として取り入れていること、また中学校の場合は合唱に関する記述が多く、具体的には文化祭等でのクラス対抗合唱コンクールの練習に関するものが多いことが報告されている。つまり、其々に分類された記述の中には、行事活動にも関連するものが一定数含まれていることが推察される。そこで、当初の分析で〈行事〉に分類した記述の回答341件を、〈行事の歌唱〉〈行事の器楽〉〈行事の鑑賞〉〈その他行事〉に細分化し、〈歌唱〉〈器楽〉〈鑑賞〉の各項目の回答者数に加えて再集計したものを表3に示した。この表からは、全ての調査年度で〈器楽〉と〈歌唱〉の回答者数の関係に先行研究と同様の傾向を窺うことができる。この傾向を確認するために $\chi^2$ 検定を実施したところ、平成29年度（ $\chi^2(1) = 20.54, p < .01$ ）（表4）、平成30年度（ $\chi^2(1) = 20.86, p < .01$ ）（表5）、令和元年度（ $\chi^2(1) = 37.81, p < .01$ ）（表6）となり、中学校時代に〈歌唱〉を挙げる者の数が明らかに多くなっていることが確認された。これは、小学校時代には〈器楽〉の内容や活動の印象が強く、それが中学校時代の印象になると〈歌唱〉の活動や内容に移行していることを示しており、先行研究と同様の結果を示すものである。

次に、〈鑑賞〉に関する記述を確認すると、小学校時代は3年間の平均値で4.94%と僅かな割合であるが、中学校時代になると18.93%と割合の増加がみられる。そこで〈鑑賞〉に関する記述の詳細を確認してみると、小学校時代では「プロのピアニストが来て、生演奏を披露してくれたことが印象に残っている。」「音楽鑑賞をして、感じたことを体で表現すること。」等の音楽鑑賞を行った場面や活動に着目した記述が比較的多く、楽曲名や作曲家の名前等の楽曲に関する知識や情報への言及が少ない。一方で、中学校時代では具体的な楽曲名等が比較的多く確認され、特に「『魔王』という曲の鑑賞したこと。歌からストーリーが頭に見えてきた感じがした。」「『魔王』の学習である。音楽の先生が生演奏を披露くださり、迫力があつたため印象に残っている。」など、フランツ・シューベルト（1797-1828）作曲の《魔王》D.328に関する記述が、〈鑑賞〉の記述全体の26.0%に確認された。

表7は、印象に残っている音楽科の授業内容や活動に対する情意的な評価の平均値を、小学校及び中学校の校種別に示したものである。この表から、全ての調査年度に

於いて、小学校時代の評価の平均値は4以上と高評価であること、中学校時代の平均値は小学校時代の平均値を下回っていることが分かる。この平均値の差を確認するため  $t$  検定を実施したところ、平成30年度、令和元年度に関しては有意であった（平成30年度、 $t(130) = 2.92, p < .01$ ; 令和元年度、 $t(95) = 2.24, p < .05$ ）。また、平成29年度に関しては有意傾向にあった（ $t(109) = 1.72, .05 < p < .10$ ）。

以上から、音楽科の授業に対する印象は、小学校時代には〈器楽〉に関する活動や内容を挙げる者が多く、それが中学校時代になると〈歌唱〉の活動や内容に移行していること、小学校時代には〈鑑賞〉の活動や内容を挙げる者が少なく、それが中学校時代になると、ある程度の人数が印象に残っている活動や内容として挙げるようになることが分かった。また、音楽科の授業内容や活動に対する情意的な評価に関しては、小学校時代は全体として高い評価を得ており、中学校時代になると評価が低下する傾向の可能性が示唆されるものの、現段階では確認に至らなかった。

表3 音楽科の授業に対する印象（学習内容・活動／行事の内容を反映）（数）

		歌唱 (含行事の歌唱)	器楽 (含行事の器楽)	音楽づくり ・創作	鑑賞 (含行事の鑑賞)	行事	常時活動, 他
H 29	①小学校	44	77	5	9	10	7
	②中学校	74	38	1	30	3	3
H 30	①小学校	79	119	6	13	16	18
	②中学校	117	68	4	46	5	8
R 01	①小学校	69	132	5	10	19	14
	②中学校	118	61	2	52	2	13
合計		501	495	23	160	55	63

表4 〈歌唱〉及び〈器楽〉の回答者数の変容（H29）（数）

	②中学校	①小学校	合計
歌唱（含行事の歌唱）	74 (56.72)	44 (61.28)	118
器楽（含行事の器楽）	38 (55.28)	77 (59.72)	115
合計	112	121	233

( ) 内は期待値

表5 〈歌唱〉及び〈器楽〉の回答者数の変容（H30）（数）

	②中学校	①小学校	合計
歌唱（含行事の歌唱）	117 (94.67)	79 (101.33)	196
器楽（含行事の器楽）	68 (90.33)	119 (96.67)	187
合計	185	198	383

( ) 内は期待値



表 6 〈歌唱〉及び〈器楽〉の回答者数の変容 (R01) (数)

	②中学校	①小学校	合計
歌唱 (含行事の歌唱)	118 (88.09)	69 (98.91)	187
器楽 (含行事の器楽)	61 (90.91)	132 (102.09)	193
合計	179	201	380

( ) 内は期待値

表 7 音楽科の授業に対する情緒的評価 (校種別) (5 件法)

	①小学校	②中学校	p 値
H 29	4.09	3.82	†
H 30	4.11	3.82	**
R 01	4.02	3.72	**

† .05 < p < .10 \* p < .05 \*\* p < .01

#### 4. 3 音楽の諸活動に対する現在の好意度について

表 8 は、音楽科の内容「A 表現」領域 (〈歌唱〉〈器楽〉〈音楽づくり・創作〉) 及び「B 鑑賞」領域の活動を、生活や社会の中でより具体化した〈音楽を聴くこと〉〈歌をうたうこと〉〈楽器を演奏すること〉〈作曲すること〉の 4 項目に対する、好きか嫌いかの観点から捉えた回答の結果 (好意度) を示したものである。この設問では不完全回答を除く平成 29 年度 108 名、平成 30 年度 130 名、令和元年度 133 名の計 371 名分の回答を分析の対象とした。この表を俯瞰すると、まず、〈音楽を聴くこと〉に対して「好き」「何方かと言えば好き」とする回答 (以下、好意的回答) が非常に多いことが分かる。3 年間の平均値は 97.04% で、非常に多くの者が日常の中で音楽を聴く活動を好意的に捉えていることが明らかである。次いで〈歌をうたうこと〉に対する好意的回答も多く、3 年間の平均値では 82.75% となる。また、〈楽器を演奏すること〉に関しても比較的に好意的回答が多く、3 年間の平均値では 61.73% となる。折しも新学習指導要領では、音楽科において育成を目指す資質・能力が「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と示されたことである。また、音楽を愛好する心情と親しんでいく態度の涵養は、従前から音楽科の目標の一つとして重要視されてきた事項である。今回の調査の精度からして、この結果が、義務教育に於ける音楽科の被教育体験期の影響に拠るものと判断することは些か乱暴ではあるが、義務教育を終了してから数年が経過している大学生が、幾つかの音楽活動を好んで親しんでいるということは、生活や社会の中で音や音楽、音楽文化を愛好していることの表出として捉えることもできよう。これは音楽科の目標の達成がある程度示唆されるものであり、今日まで蓄積されてきた教育実践の成果として捉えることもできよう。

その一方で、〈作曲すること〉に関しては、「何方かと言えば嫌い」「嫌い」とする回答 (以下、否定的回答) の割合が 32.61% であり、3 割程度の者が日常の中で作曲活動に対して好意的に捉えていないことが窺える。また、中央値が「何方とも言えない」

に位置しており(53.90%),回答の半数以上を占めていることから,対象者の多くは〈作曲すること〉に対して具体的なイメージを持てる段階に無く,その結果中庸的な回答を選択した可能性も考えられる。本来〈音楽づくり・創作〉の学習活動は,義務教育に於いて全ての生徒児童に提供されている筈である。一方で,前述の日本音楽教育学会が実施した2015年の調査に於いても,〈創作〉に関する回答記述はごく僅かであったことが報告されており,この結果に関して津田(2016)は「創作の学習指導の充実は,現行学習指導要領・音楽(平成20年告示)改定の際の,小・中・高等学校を貫く要点の一つであった。平成25年2月国立教育政策研究所が実施した小学校学習指導要領実施状況調査(音楽)においても,音楽づくりについては,児童は情意面,教師は指導面についての課題が指摘されているところである。子供が音楽づくりや創作の学習活動が好きか,嫌いかは別として,子供の声としてほとんど上がってこないことは今後課題を残している」<sup>[6]</sup>として,別の国立教育政策研究所(2015)による調査結果を取り上げながら苦言を呈している<sup>[7]</sup>。前述の通り,本調査(項目①及び②)に於いても〈音楽づくり・創作〉に関連する記述は極端に少なく,3年間の合計は全体の僅か1.77%であった。〈音楽づくり・創作〉に関しては,その活動の目的を児童生徒が確実に身に付けられるよう,学習指導の充実を図ることが喫緊の課題であろう。そのためには,これまで以上に教師による教育現場をフィールドとした実践的研究の蓄積に期待がされる所であり,教員養成段階に於ける学修の内容に関しても,再検討の必要性を示唆するものである。

表8 音楽の諸活動に対する好意度(数)

		好き	何方かと言 えば好き	何方とも言 えない	何方かと言 えば嫌い	嫌い
	音楽を聴くこと	93	13	1	1	0
H29	楽器の演奏	39	31	25	11	2
(108)	歌をうたうこと	64	32	5	5	2
	作曲すること	3	12	62	19	12
	音楽を聴くこと	111	14	5	0	0
H30	楽器の演奏	53	33	22	12	10
(130)	歌をうたうこと	73	34	14	5	4
	作曲すること	10	8	71	19	22
	音楽を聴くこと	110	19	4	0	0
R01	楽器の演奏	38	35	38	17	5
(133)	歌をうたうこと	64	40	15	9	5
	作曲すること	3	14	67	27	22

## 5 まとめと今後の課題

今後の音楽科教育の在り方を教員養成課程の視点から考察する基礎的な資料の収集を目的として、本学の初等教育課程の学生を主な対象とした調査を実施し、彼らの音楽学習経験の実態や義務教育を通して経験してきた音楽科の授業の様相を中心に、伊藤・笠島（2003）による先行研究の結果等と比較しながら確認を行った。

その結果、対象者は同年代の者と比較して大学入学以前にある程度の音楽学習経験がある集団であること、音楽科の授業の中で経験してきた学習内容や活動には印象に残っているものと余り印象に残っていないものがあり、これまでに学習指導要領に示されてきた音楽科の内容「A表現」〈歌唱〉〈器楽〉〈音楽づくり・創作〉及び「B鑑賞」の印象には偏りがあること、特に小学校時代は〈器楽〉に関する印象が強く、それが中学校では〈歌唱〉に移行する傾向にあること、また〈鑑賞〉に関しては小学校時代には印象が薄く、中学校時代になると印象に挙げる者が増加するものの、全体の2割にも満たないことが確認された。また、授業の印象として、合唱コンクール等の学校内外で行われる行事活動に向けた準備や練習に取り組んだことを挙げる者が多いことも確認された。これは、音楽科の授業として取り組むべき部分と学校全体で取り組まなければならない部分との棲み分けを明確にする等の、今後のカリキュラム・マネジメントの重要性を示唆するものであるが、その一方で、学習者側は授業の中で行事活動に向けた準備や練習に取り組むことに対して、比較的肯定的な印象を以て捉えていることも明らかとなった。

音楽科の授業内容や活動に対する情意的な評価に関しては、小学校時代では全体として高い評価を得ているのに対して、中学校になると低下する傾向が見られるが、今回の調査では全ての年度に於いて有意差を確認するには至らなかった。この結果には、調査手続きの不備により、平成29年度の実施調査のみ質問紙を用いたことが影響している可能性もあるため、引き続き調査を行っていきたい。

音楽の諸活動に関する現在の好意度に関しては、〈音楽を聴くこと〉〈歌をうたうこと〉の2項目に関して好意的回答が多く、〈楽器の演奏〉に関して否定的回答は少ない。一方で、〈作曲すること〉に関しては中庸的回答が5割を占め、否定的回答も3割以上に確認された。調査項目①及び②の回答に於いても〈音楽づくり・創作〉に関する記述は非常に少ない。〈音楽づくり・創作〉に関しては、児童生徒が主体的、且つ確実に学習内容を習得できるよう、教育現場及び教員養成課程の両面から改善策を検討していく必要があるものと考えらる。

また、今回は特定の大学の学生を対象とした調査である。今後は他大学等で小学校教員を目指す学生を対象とした追試を実施すること等を検討する。

## 注

- 1) 日本音楽教育学会のwebサイト上で実施された調査で、2016年発行の「音楽教育実践ジャーナル vol.13 no.2 (特集・学習者の視点から音楽教育を考える)」上で報告された。調査期間は平成27年4月～7月、全国の小中高生を対象とし、小学

生 72 名, 中学生 193 名, 高校生 38 名の計 303 名より回答を得た。調査概要の詳細は新山王 (2016)<sup>[2]</sup>を参照のこと。

- 2) Benesse 教育研究開発センターが実施した調査 (「学校外教育活動に関する調査 2009」)。2009 年 3 月下旬, 3 歳から 17 歳 (高校 2 年生) の子供を持つ母親 15, 450 名を対象者としてインターネット上で実施された。調査概要の詳細は Benesse 教育研究開発センター (2009)<sup>[3]</sup>を参照のこと。

#### 引用・参考文献

- [1] 伊藤勝志・笠島美教(2003). 音楽科教育における今日的課題を探る 教育情報科, 30, 11-20.
- [2] 新山王政和 (2015). 「音楽についてこう考える, こう言いたい」学習者アンケート Web 調査の分析 — 子供にとって音楽は「アイデンティティやコミュニケーション」のツール — 音楽教育実践ジャーナル, 30 (2), 8-19.
- [3] Benesse 教育研究開発センター (2009). 子どものスポーツ・芸術・学習活動データブック ベネッセコーポレーション
- [4] 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領 東山書房
- [5] 副島和久 (2017). 各領域・分野のバランスと関連 副島和久 (編) 平成 29 年版中学校新学習指導要領の展開音楽編 (pp.71-71) 明治図書
- [6] 津田正之 (2016). 子供の声に耳をすます — 「教わる側の発信」(1987) と比較しながら — 音楽教育実践ジャーナル, 30 (2), 20-23
- [7] 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2015). 小学校学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点 (音楽) 国立教育政策研究所教育課程研究センター Retrieved from [https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido\\_h24/index.htm](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/index.htm) (2020 年 11 月 1 日)

#### 付記

本稿で使用したデータの一部は, 全国大学音楽学会第 34 回全国大会《仙台大会》で発表した研究成果に基づき, 新たに調査及び分析を加えたものである。